
異世界で。バカが四人で。ジョブチェンジ。

武中略介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界で。バカが四人で。ジョブチェンジ。

【Nコード】

N2326Y

【作者名】

武中略介

【あらすじ】

異世界でバカが四人で仕事を探す話。
短いコメディです。
暇つぶし程度にどうぞ。

(前書き)

かっとなつてやった。
今も反省していない。

四人の男女が、異世界に飛ばされた。

男が二人、女が二人。彼らは幼馴染で、高校卒業までずっと一緒に過ごしてきた兄弟のような存在だった。

名前を、それぞれヨシタケ、ダイキ、チハル、マミといった。

彼らは異世界でなんやかんや……それはもう盛大なんやかんやがあつて、仕事を得ることにしたのだが。

転職の神殿で、彼らは相談する。

ヨシタケが言う。

「やっぱり、僕ら個人個人の特徴や特技を生かした職業にしたほうがいいよ。前の世界での仕事に順応させたほうがいいと思うんだ」

ヨシタケは思っていた。

こいつら三人はバカだから、僕がしっかりしなければ。

「私は浪人生よ」

最初に、お嬢様のような見た目のチハルが声をあげる。

「俺は家でネット関係の仕事をしている」

眼鏡をかけた、インテリ風の男が渋い声で言った。

「あたしは母さんの手伝いしてるわよ」

最後に、茶髪のちやらちやらした女が言う。

「ヨシタケ、お前はなにしてたんだ？」

「東京行ってミュージシャン目指してた」

ヨシタケはバカだった。

「よし、ではまとめてみようか」

ダイキが懐からメモ帳を取り出し、ボールペンでなにやら記す。

「それぞれの仕事を鑑みるに、このジョブが最適だろう」

ヨシタケ 遊び人
チハル 遊び人
マミ 遊び人
俺 司令塔

チハルが叫んだ。

「大変！ 前衛がいないわ！」
マミが諭した。

「後衛もないわよ、チハル」
「そういう問題でもねえよ！」

ヨシタケは頭が痛くなった。もともと痛かったので大した違いは無かった。

あと司令塔ってなんだよ。働く気ゼロじゃねえか。

「ダイキ、それ貸せ。僕が書く」
ヨシタケは、ボールペンとメモ帳を奪うと、ペンを走らせる。

ダイキ ばくだんいわ
チハル ばくだんいわ
マミ ばくだんいわ
僕 ミュージシャン

チハルが叫んだ。

「大変！ 人間がいないわ！」
マミが諭した。

「ミュージシャンは人間よ、チハル」
「というかヨシタケ、お前音痴だからミュージシャンは無理だろ」
ダイキが真顔で呟いた。

ヨシタケは渾身のボケをスルーされて悲しくなった。それ以上に夢を否定されて悲しくなった。

「しかしヨシタケ、やっぱり最初は前の世界と同じ職業にしてみた

「どうだ？」

「いい案ね、ダイキ」

とりあえず、ヨシタケはメモ帳をめくり、職業案を記した。

ダイキ ニート（自宅警備員）

チハル 浪人生（四年目）

マミ 家事手伝い（家から出ない）

僕 フリーター（バイトの面接すら受からない）

チハルは叫ばなかった。

だれもなにも言わなかった。

彼らには涙で滲む視界を服の袖で拭い、メモ帳をめくった。

「気を取り直して、部活別に職業を決めるのはどうかな？」

マミが名案っぽいことを言った。

皆が賛成した。

「ヨシタケがペンを構える。

「ええと……ダイキは、何部だったっけ？」

「帰宅部」

ヨシタケはダイキの矢印のあとに帰宅部と記した。

「チハルは？」

「帰宅部」

ヨシタケはチハルの矢印のあとに帰宅部と記した。

「マミは？」

「帰宅部」

ヨシタケはマミの矢印のあとに帰宅部と記した。

「僕は？」

聞いてから、ヨシタケは自分のことだと気付いた。

ヨシタケは自分の矢印のあとに帰宅部と記した。

彼らは黙ってメモ帳をめくった。

「よし。このままじゃ埒があかないし、いっそ適当に決めてやろう」

「じゃないか」

ヨシタケが代表して神官に話しかけた。

「全員魔術師でいいです」

「おや、魔術を使えるのですか」

「使えません」

「じゃあ無理です、ライセンスを渡せません」

ヨシタケはめげなかった。

「全員剣士でいいです」

「剣術の心得が？」

「ありません」

「じゃあ無理です、ライセンスを渡せません」

ヨシタケはめげそうになったが、持ち直した。

「全員盗賊でいいです」

「それは犯罪です」

ヨシタケの心はほとんど折れかけていた。

ヨシタケはやけくそ気味に叫んだ。

「じゃあもう遊び人でいいです！」

「失礼ですが、踊りの経験は」

「ありません！」

彼らは揃って、神殿から追い出された。

その後、彼らは額をつき合わせて相談し、冒険者はやめて街で就職することにした。

ヨシタケは街の入り口で「ここは転職の神殿のある街だよ」と言い続ける仕事にした。日給は五千ゴールドだった。

ダイキは大通りの武器屋の前で「武器は装備しないと意味が無いぜ！」と叫び続ける仕事にした。日給は五千ゴールドだった。

チハルは防具屋で「槍にしようかな……。剣にしようかな……。」と迷い続ける仕事にした。日給は五千ゴールドだった。

マミは道具屋で「ポーションが買い得！」と宣伝し続ける仕事にした。日給は五千ゴールドだった。

彼らは日々、必死に働いた。

そして、一ヶ月が過ぎたある日、彼らは集まった。

彼らは職を失っていた。

勇者が魔王を討伐したからだ。

彼らは、意味のない者になってしまった。

途方にくれた。

ヨシタケは、街の人に最寄の樹海の場所を聞いた。

その人は親切にこう言った。

「樹海はないけど、崖ならあるぜ。俺も無職なんだ、一緒にいこう」

それが「行こう」なのか「逝こう」なのかヨシタケたちにはわから

らなかったが、五人でそろそろ連れ立って崖へと向かった。

途中、街の人たちがたくさん崖へ向かっていたので、合流した。

最終的に百人を超える大所帯になった。

全員が、魔王討伐にともなつて職を失った者たちだった。

ダイキが呟いた。

「これだけいたら、新しい村を興せそうだな」

チハルが言った。

「これだけいたら、畑も楽に耕せそうね」

マミが言った。

「これだけいたら、発展も早いわよね」

最後に、ヨシタケが言った。

「僕が町長をやるよ」

五十年後、崖の近くにある村で、四人の男女が額を突合せて相談していた。

ひとりの男が叫んだ。

「どうしよう！ 元の世界に帰るのを忘れていたよ！」

ひとりの女が叫んだ。

「大変！ 元の世界に帰る方法を調べていたの、忘れていたわ！」

さっきとは違う、男が叫んだ。

「やばい！ 昨日、畑の近くにモンスターが出たらしい！」

さっきとは違う、女が叫んだ。

「元の世界とかどうでもいい！ 今はモンスターの対処が先よ！」

彼らは、今の自分達に満足していた。

彼らはバカだった。

いつそ気持ちがいいほど、バカで単純で、そして幸せだった。

(後書き)

感想、評価等よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2326y/>

異世界で。バカが四人で。ジョブチェンジ。

2011年11月5日02時03分発行